

龍谷大学佛教文化研究所報

第29号

◇研究ノート

『徒然草』の伝本研究と龍谷大学所蔵本

木村雅則
(糸井班)

(一) はじめに

現在、指定研究系井班では「古典随筆伝写本の研究」を進めている。具体的には、龍谷大学図書館が所蔵している『枕草子』（中古）、『徒然草』（中世）、『たはれ草』（近世）の写本について、本文系統などを中心にそれぞれが担当して研究を進めるとい形を取っている。

本稿は、その中で『徒然草』について、龍谷大学の所蔵本を紹介するとともに、本研究の課題などについて記すものである。

(二) 『徒然草』の伝本研究

およそ古典作品の伝本研究というのは、

非常に手間のかかるものである。膨大な伝本を読みほどこき、比較対照する。この比較対照とは単に語句の異同だけではなく、内容解釈に至ることまた当然である。そして本文だけでなく傍書・補記などもある大切な情報であり、十分な検討を要す。当然書誌学的な知識も不可欠である。どこまでも地道な作業であり、同時に神経をすり減らす仕事でもある。

『徒然草』は、近世の数多い版本を始めとして、現在もなお中学・高校の教科書教材の中心であるほど広く人口に膾炙してきた古典随筆である。またその研究についても、慶長九年（一六〇四）の『徒然草寿命院抄』を嚆矢として、実に多くのものが世に出されてきている。現存す

る最古の写本は、永享三年（一四三二）の奥書を持つ正徹自筆本であるが、伝本関係や分類などの研究となると、現存する伝本の数がおびただしい上、『國書総目録』に未記載のものも少なくないためか、諸説が示されているものの、未だ定説を見るまでには至っていない。

『徒然草』の伝本研究については、桑原博士『徒然草研究序説』（明治書院・昭和五一年）が詳細である。それによると、現在でもその出発点は鈴木知太郎氏「徒然草諸本解題」（山田孝雄『つれく草』付載・宝文館・昭和一八年）であるという。鈴木氏の研究は三六本の写本と刊本を対象とした考察である。さらに、高乗勲氏が『徒然草の研究』（自治日報社・昭和四三年）の中で、七一本の伝本を対象として分析し、嵯峨本系・貞徳本系・桂宮本系・正徹本系の四系統を示した。だが、現在多くの校本が鳥丸光広本を底本としていることから考えると、鳥丸本を中心とした系統を立てるのが自然であろう。また、特異な章段配列を持つ常縁本の位置づけが妥当性に乏しいとも言わざるを得ない。

現在最も有力な説は、鳥丸本系統・幽齋本系統・正徹本系統・常縁本系統の四分類とするものである。これは、桑原氏が前掲書で示す分類であり（鳥津忠夫氏にも同様の見解がある）、その後、齋藤彰氏が『徒然草の研究』（風間書房・平成一〇年）でさらに詳細な伝本分析と

もに示している。これとても幽齋本系統が第一類・第三類、鳥丸本系統も第一類・第三類などと小分類され、相互の小分類間でそれぞれに類似性が重複しているような部分があるが、現在最も有力な説であると言つてよいと思われる。

(三) 龍谷大学所蔵の『徒然草』

現在、龍谷大学図書館に所蔵されている『徒然草』は、古注釈書類を除くと、次の二写本・五版本が確認されている。

〈写本〉

①『つれづれ草』(Z15832。二冊。室町期に写されたものと推定される。

所謂「龍谷大学本」である。下巻に一折二丁の落丁と思われる箇所があるが、ほぼ完本である。これを底本にして、秋本守英・木村雅則が翻刻し、総索引を作っている（『龍谷大学本徒然草本文篇』・平成九年・勉誠社、『龍谷大学本徒然草索引篇』・平成一〇年・勉誠出版）。なお、これらが刊行された時は、この写本が龍谷大学に所蔵された直後のことであり、まだ整理番号が付されていないかった。

この写本の書誌解題を前掲『龍谷大学本徒然草本文篇』から引用する。

「体裁は、縦二四・五、横一八・〇。纏の大きさの綴葉装冊子本で、上・下の二冊、表紙は蕉茶色の紙表紙で、稲妻菱繋唐草散空押模様があり、見返しは本文と共紙である。稲

妻菱繋は殊に裏表紙にはつきり出ているが、菊唐草散は空押が辛うじて判別できる程度までに均されてしまっている。外題は縦一五・〇糎、横三・二糎の撫子色地に銀泥で花菱と唐草模様を描いた中央題簽に「つれづれ草上(下)」と墨書する。内題はない。本文の料紙は厚紙の斐紙(鳥の子)で、虫損はごく僅かである。本文墨付は、上冊七八丁、下冊五八丁で、丁付はない。本文は一筆書きで、一面に一〇行、一行は二〇字前後で、章段毎に改行して起こすとともに、章段の改まったことを行頭の右肩に朱線を施して示す。…(中略)：奥書、識語の類はなく、書写者や書写年代に関しては不明というほかない。(四〇一頁)

本文は、高乗氏の分類で言うところ、嵯峨本系と貞徳本系の混合本文であろうと考えられる(ただし、上巻と下巻とで拠った伝本が異なる可能性が高い)。また齋藤氏の分類で言うと幽齋本系統第二類の本文との類似も考えられたが、稿者が精査した結果、幽齋本系統第二類ではないとするほうが蓋然性が高い(拙稿「所謂幽齋本系統と龍谷大学本徒然草」、『國文學論叢』第四五輯・平成一二年)。このように、この写本の系統上の位置づけについては、まだ問題が残る。中には、ある特定の伝本とのみ本文が共通する箇所が認められたりもする。今後も精査を続

けていくつもりである。

②『つれづれ草』021.37.1。一冊。写本。

延徳二年(一四九〇)写か。

表紙には「つれづれ草 全」とあるが、上巻のみである。「延徳二年 平忠重写」とあることから、高乗氏が前掲書で「延徳本」として紹介している。また、「龍谷本」として桑原氏・齋藤氏も紹介しており(桑原氏はこの影写本である京大文学部蔵本に拠っている)、齋藤氏は正徹本との異同を詳細に調べている(「正徹本系統つれづれ草の古態の性格―龍谷本の性格―」・『徒然草の研究』第一章二・平成十年)。前掲拙稿ではこの写本を「写字台文庫本」と称していた。これらは、正徹本系統として位置づけられているようである(後述)。

〈版本〉

③『つれづれ草』021.37.52。二冊。

万治二年(一六五九)、高橋清兵衛刊行。前掲の「龍谷大学本徒然草本文篇」において、「萬二本」として、秋本・木村が翻刻した。

④『新校絵入 つれづれ草』914.53.52。二冊。

元禄一六年(一七〇三)刊。「加賀屋作兵衛・荒川屋限兵衛蔵版」の奥書がある。

⑤『つれづれ草 上下』022.739.2。一冊。

元文二年(一七三七)刊。「菊屋善兵衛版」の奥書がある。

⑥『つれづれ草 絵入 上下』914.45.6 W. (一)。二冊。

嘉永三年(一八五〇)補刻の袖珍本(小型本)である。「浪華書林 敦賀屋九兵衛 象牙屋治郎兵衛 敦賀屋彦七」の奥書がある。

⑦『つれづれ草 絵入 下』021.37.71。一冊。

正徳二年(一七二二)刊。奥書には「和泉屋茂兵衛」の名がある。内題には「新版絵入 つれづれ草」とあり、表題は「下」となっているが、一冊で完本である。

(四) 本研究の課題

今回の指定研究は、版本ではなく「伝写本」としており、「龍谷大学本」(前項の①)は既に本文翻刻・索引を刊行していることもあるので、本研究の中心は、前項の②、つまり「延徳二年 平忠重写」とある写本においている。

この写本の書誌解題は、既に齋藤彰氏によってなされている。いまそれを引用する。

「本書は二七・五×二二・八糎の袋綴一冊本。上冊のみ。表紙は薄茶色地の雲紙で原装。表紙左に「つれづれ草 寫本 全」と直に書く。本文とは別筆である。見返しは本文共紙。本文料紙楮紙。遊紙首尾ともになく、墨付六五丁。一面一二行。章段区分は改行による。但し、第一三

四は同筆の墨での行間の合点による。墨の同筆の補記・校合・傍書がある。六五丁裏中央に「兼好作也云」とあり、六六丁表に「延徳二年 八月日 平忠重写」の奥書がある。本文と同筆である。正徹本系統に属する延徳二年写本と認める。一丁表の右下に「寫字臺之藏書」の長方形陽刻朱印を捺す。虫損がある。」(前掲『徒然草の研究』・一五頁)

これに追加するとすれば、「一行は二字前後」ということぐらいであろうか。この写本の注目点は、次のごとくである。

まず、この写本が奥書通り実際に「延徳二年」に書写されたものかどうかという点である。この写本の親本に「延徳二年 平忠重写」とあったものをそのまま転写し、実際には延徳二年以降の別の年に書き写されたのかもしれない。従来の説でも、鈴木知太郎氏は「延徳の写とは認め難し。されど室町末期を降るものにはあらざるべし」、高乗勲氏は「延徳二年の書写でないとしても室町末期を下らぬものと見られている」として、室町期だとしても延徳二年書写説を支持しないが、齋藤彰氏は前述の通り「正徹本系統に属する延徳二年写本と認める」とされており、意見が分かれている。

次に、この写本は正徹本系統と見なされているようであるが、その妥当性の再検討である。例えば高乗勲氏は「正徹本

の祖本と同祖関係」だと言うが、同時に「川瀬氏の説のごとく正徹本の伝写と見ることはできない」とも言っている。

さらに、独自異文の問題がある。齋藤氏の研究では、正徹本の古い形態を探る目的で、正徹本とのみ比較校合しているが、他の系統本とはどうなのか。さらに細密な比較校合の必要を感じる。

加えて、同じ室町期の写本ということもあり、この写本が「龍谷大学本」(前項の①)と関係があるかないかも判断する必要がある。

そのために、この写本の本文を翻刻し、研究に資することは不可欠なことであると考え。また、翻刻本文を提供することにより、別の手法での伝本研究(例えば稿者が示したような「文節対照法」など)にも大きく寄与できようと思われる。

(五) おわりに

◇ 研究概要報告 ◇

平成十七年度(二〇〇五)本研究の研究所の研究計画は、指定研究二件(新規二)、常設研究三件(継続二、新規一)、特別指定研究三件(継続三)、共同研究四件(継続四)、そして個人研究三件(新規三)が設置され、合計一五件の研究プロジェクトが構成された。次に示すような具体的な計画のもと、総研究員数百七十一名の協力によって推進される。

平成十六年度までの研究成果として『俳教文化研究所紀要』第四十三集に共同研究他の報告論文九編、研究員報告一編の他、恒例の本研究所講演会の講演記録二編を収

めた。『徒然草』は、伝本の数はおびただしいものの、桑原氏や齋藤氏が指摘するように、序段と二四三段に分ける現行の区分は、浅香久敬『徒然草諸抄大成』(貞享五年(一六八八)のそれを踏襲しているし、また、章段の配列や区分が異なっても内容が新たに加わった伝本はない。そう考えると、伝本関係の確定も何とかなるような気がするものの、室町期の写本が少ないことや、本文異同の多さがそれを阻んでいる。愛されてきたもののゆえの悲劇なのかもしれない。

この「延徳二年」本は、比較的早くから紹介され、校合資料として使われてきたものの、未だ翻刻がなされていないのは非常に残念なことであった。所蔵者として、広く『徒然草』研究に寄与できる部分が大きいと考え、今回の研究で取り上げることになった。これにより、徒然草研究に少しでも貢献できるところがあることを祈っている。

めた。龍谷大学善本叢書としては、第二十五輯『三条西公条自筆稿本・源氏物語細流抄』(責任編集者 安藤 徹氏)が出版された。仏教文化研究叢書としては、『反省(曾)雑誌I』(責任編集者 福嶋 寛隆・藤原 正信・中川 洋子氏)及び親鸞思想と現代世界V『宗教と科学 宗教と環境・生命倫理』(責任編集者 武田 龍精氏)が出版された。永年の研究成果によるものである。

A 指定研究(龍谷大学図書館蔵の貴重書の研究・出版)

1、日本語日本文学 龍谷大学図書館蔵『太平記』の研究(初年次)

主任・大取 一馬 研究員 二二名
(研究の目的)

研究対象とした本学図書館所蔵の『太平記』一二冊(図書番号02137013)を、三年後に龍谷大学善本叢書に解説を付して影印し、公刊して、『太平記』の研究に寄与することを研究の目的としているが、その他に、三年目かあるいは四年目に、この指定研究成果を論文集として研究叢書にまとめて公刊する予定である。

(研究計画)

一年目には本学の『太平記』十二冊を全てマイクロフィルムに収め、紙焼にして手元に置き、それを基に、他機関所蔵の『太平記』との比較研究を行う。あわせて、これまでの諸本研究の成果を蒐集し検討する。

二年目には、一年目の諸本研究を継続すると共に、作品の文学的・歴史的・思想的な面についての内容研究についても並行して行う。

三年目には本学図書館所蔵の『太平記』を解説を付して善本叢書(全四冊になる予定)として公刊する。また、その後、この『太平記』の諸本研究、及び内容研究の成果を論文集にまとめ、研究叢書の一つとして刊行しよう考えている。

2、日本語日本文学 龍谷大学図書館蔵古典随筆伝写本の研究(初年次)

主任・糸井 通浩 研究員 一三名
(研究の目的)

古典作品のうち、随筆文学ジャンルに分類される龍谷大学図書館所蔵の古典籍には、伝写本系統が充分調査されないままの写本類が多く存在する。それらの内から、以下の八点をピックアップして、その伝本系統並びに文献としての価値的位置づけ